

教師の本分

2022.10.20

今、中学校での話題の一つに、部活動を学校から地域社会に移行する制度改革がある。今までもずっとこの話題は出てきていた。今回は本気である。

歴史をさかのぼれば、1987年の臨時教育審議会が生涯学習の理念を打ち出し、学校以外の学びの場でも学校と同等の学習成果を認める方向へ舵を切った。この段階で、部活動を学校外へ移譲する検討がなされてもよかった。

1992年から月1回の学校週5日制が始まり、2002年に完全施行された。1991年にはサッカーJリーグが発足し、プロチーム下部組織で中高校生年代の活動が可能になった。地域における運動の場が整備された。

にもかかわらず、中学校の部活動は何も変わらなかった。部活動の在り方が議論の対象にもならなかった。それは、競技団体や学校の意識が変わらなかったことが一因であろう。学校は、生徒指導面での効用を強調する。だが、部活動に費やす時間と労力を少しでも使って、普段の指導において個別指導ができないのかということ、そうでもない。きっと部活動のほうが指導しやすいのである。

若い先生方には、まもなく中学校での部活動は変わるからと言っている。先生方の教員としての生活が大きく変わる。そのくらい、中学校における部活動の占めるウエイトは大きい。平日の放課後には2時間の部活動の時間がある。終わるのは、毎日、顧問の先生方の退勤時間後である。

週末の3時間の指導もある。週末は、これで終わらない。中体連の大会以外にも競技団体主催の各種大会がある。そうすると、1日中である。練習試合もある。大会に出るには、申し込みが必要である。一人一人の生徒に参加確認を行う。参加料も集めなければならない。大会では、競技団体主催とはいえ、先生方が運営をしているケースが多い。加えて、部活動に対する保護者からの要望等も多い。

もし、本当に中学校から部活動がなくなったら、劇的に変わる。今回の制度改革ではそうなる。すでに変わる前から心配事がどんどん出ている。これが変わりにくい、変わることに抵抗がある、変わろうとしない教員の体質である。いや、日本人の体質である。変わるためには、制度を変えるのが一番である。有無を言わず変えるのである。教員、あるいは日本人の特質として、決まったことには従うということがある。コロナ対応を見れば、そのことがよくわかる。

BDKという言葉があるそうである。部活(B)、大好き(D)、教員(K)である。このような教員は行き場がなくなるかということもそうでもない。個人の立場で地域活動に加わってもらえれば大歓迎であろう。教員のやりがいや熱意は、本務たる授業や生徒指導に向けてもらわなければならない。

本分とは、人が本来つくさなければならぬと定め。その人にとっての本来的な義務である。そうであるならば、教師の本分は部活動指導ではなく授業であり、生徒との日常的な交流であろう。まもなく、いや、ようやく教師が本分を全うできる時代がやってくる。